

係。御許山の馬蹄石と薦神社の御足跡石の意義など、なお拝聴したいことばかりである。

『八幡大菩薩の世界』を読んで、思い浮かぶままを取り留めもなく書き連ねて見た。実は読んだとは言え何もかも理解出来るほど熟読したわけではなく、的を射た書評はむしろ宇佐風土記の丘歴史民俗資料館で発表した新刊紹介が要を得ているので、次の通りそのまま使用させていただくことにする。

——開館5周年記念事業とした「八幡大菩薩の世界」展の列品解説を兼ねて刊行したもの。その内容は、八幡神成立の歴史を含めた「八幡神の成立」にはじまり、その展開を「神仏習合と八幡神」「八幡信仰の拡大と蒙古襲来」の2部に分けて、やさしく詳述。多数の写真、地図、図表なども理解を助け、好評である。巻末のユニークな年表もよい。なお、5年ごとに「八幡展」を開催の予定で、いわば「八幡文化叢書」の第1集ともいえるものである。——と。巨視的とか学際的とか、たまには私共には耳なれない言葉も出てくるが、全体的に平易な表現で、しかも高級な内容のある八幡様全体についての概説である。八幡様にご関心のある人は勿論のこと、無
い人には特に是非ご一読をおすすめしたい。

(県文化財保護審議会委員・XXXXXXXXXX)

書評

八幡大菩薩の世界

須磨和啓

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館(以下「資料館」という)は、赤塚古墳より出土した「三角縁神獸鏡」は、宇佐市民いるが、赤塚古墳より出土した「三角縁神獸鏡」は、宇佐市民は勿論のこと、大分県民にとっても貴重な文化遺産である。今回、資料館が五年ごとに開催する八幡展の一環として、去る昭和六十一年十月に、「八幡大菩薩の世界」展を開催した。全国から八幡神やぐらに由緒のある文化遺産を次々に集結し、展示公開した。その解説図録が『八幡大菩薩の世界』である。本書は三章からなる。第一章は「八幡神の成立」で、古代の宇佐と八幡神、御許山と御澄池、放生会と行幸会、応神天皇と八幡神の各節に分けられている。八幡神の出自の神秘性、豊前地方の渡来人と中央政府との関係などについて述べている。

第二章「神仏習合と八幡神」は、弥勒神宮寺の成立、八幡信仰と美術の両面から考察している。弥勒寺が神宮寺として成立すること、神仏が渾然一体化する一種の宗教改革おのずからが自然成立したことも画いている。この中で、絵画・絵巻物・仏像等に見られる八幡神の僧形についての説明は親切である。

第三章は「八幡信仰の拡大と蒙古襲来」で、八幡信仰の展開、荘園制と八幡信仰、蒙古襲来に分けられている。中央に八幡神が常に鎮座するさまは、社会的にも精神的にも心のよりどころであったこと。豊前・豊後を中心に九州各地に宇佐宮の荘園の痕跡があり、名実共に九州随一の荘園領主になっていること。精強な蒙古軍に対し、南無八幡大菩薩の名のもとに神風が吹き荒れるさまは、諸神を擢ぶる功績があつたこと等を画いている。

巻末には、各地から集結した列品の解説、八幡大菩薩の世界の年表が示されている。

本書の特徴は、宇佐神宮を中心に、奈多八幡宮・杵原八幡宮・頼洲八幡宮・薦神社・石清水八幡宮・東大寺・薬師寺等の国宝・重要文化財クラスの物品を紹介し、八幡信仰の変遷が手に取るように解説されており、資料館の創立五周年を飾

るにふさわしい図録であるといえる。

この図録の中でもそうであるように、宇佐の八幡神は、多くのナゾに包まれた神であるが故に、研究者にとっても頭を悩ませたいことばかりである。

八幡神の出自については、当時の人々の間に信仰されていたなにかの宗教が、「八幡神」という一つの言葉の中に集約された用語として統合・生成されたものではなからうかとも思える。そして、仏教ともうまく習合して、八幡神がその代表となつたのであろうとも思う。

仏教では、特に天台宗・真言宗の宗派が宇佐の八幡神を土台として、何がしかのメリットを持って成長し、今日に及んでいることは、まぎれもない事実であろう。このことは、八幡神の魅力、また弥勒神宮寺の存在が大きなウエイトを占めていることも、推察できるところであろう。また、中央政府よりも、大陸・朝鮮半島に近く、それらの文化が早く受容され、それに「宇佐」が一早く順応できたものである。「宇佐」ではハイレベルの人々によって宗教集団が形成され、豊国の奇巫に代表されるような一面があつたであろう。

時の流れと共に、しだいに中央政府の文化が勝るようになる

り、逆に中央から宇佐地方に流れる文化となっている。仮に宇佐が外来宗教の中央的存在であった可能性があるならば、当然のように高度の文化が発達したであろう。中央政府より派遣される留学僧や諸人が、地方である「宇佐」に立ち寄る必要があったのは、何を物語るのであらうか。ただ「八幡神の発祥の地」であるというだけでは、説明にならない。

この図録では、「八幡神の成立」のナゾと古代社会について、いろいろの立場からの検討がなされてこそ、第一回の「八幡展」の解説書にふさわしいものになったのではあるまいか。あるいは、五年後の「第二集」に論争が展開される予定か、楽しみにしたい。

いずれにせよ、八幡神は中央政府に迎えられ、一地方神が一躍日本の表舞台に飛び出しては、石清水八幡宮として京師に祀られ、また鶴岡八幡宮として武士の力によって、武士の守護神として祀られ、しだいに日本全土に八幡神が祀られるようになった。

現在約十一万の神社が存在するが、その中でも四万社あまりが八幡様であることは驚きであり、喜びを感じている。

八幡信仰が資料館の研究課題として解明されて行き、八幡

信仰が大いに学術的に論じられることを、心から祈念するものである。今回の「八幡展」を拝観した人々も、この図録刊行を喜び、次回の「八幡展」を待望しているものと思う。

(宇佐神宮権柄宜)

大分県地方史料叢書(4)

「縣治概略」(I)

「縣治概略」(II)

大分県成立以来の布告・達を集大成した
県草創期を知る基本史料

(会員各二五〇〇円、会員外各三〇〇〇円)

発行者 大分県地方史研究会